

氏 名	武 千晴
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 の 番 号	甲第 193 号
学 位 授 与 年 月 日	2016（平成 28）年 3 月 21 日
学 位 授 与 の 条 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	感化院から児童自立支援施設に至る施設に培われて来た子育て・子育て — 「教護理論」からキョウゴ・モデルへ —
論 文 審 査 委 員	主査 岩木秀夫 （教育学専攻 教授） 副査 藤田武志 （教育学専攻 教授） 副査 清水睦美 （教育学専攻 教授） 副査 増田幸弘 （社会福祉学専攻 教授） 副査 服部 朗 （愛知学院大学法学部教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

まず、キョウゴ・モデルとは、サブタイトルの通り、感化院から児童自立支援施設に至る施設に培われて来た子育て・子育てモデルを指す。これは筆者の造語であり、以前の研究発表や報告等では「 」付の「教護理論」として来たものとほぼ同じである。次に、「感化院から児童自立支援施設に至る施設」について、この施設の設立史は本論第Ⅱ部で詳しく整理するが、この施設は法制度化される以前より、感化院の名称で存在しており、その後、感化院、少年教護院、教護院、そして現在の児童自立支援施設と変遷してきたため、「感化院から児童自立支援施設に至る施設」と簡略表記したものである。なお、本文中では更に省略して単に“施設”と表記することとした。

現在、この施設に入所する子ども達は、児童福祉法の措置が全体の約 8 割、残りの約 2 割が家庭裁判所の決定による。つまり、罪を犯した子どもや「不良少年」あるいは「非行少年」と呼ばれる子どもを中心に、児童養護施設などで「施設不適応」を起こしたとされる子どもなどが入所しているということである。

罪を犯した子どもや「不良少年」なのになぜ、“子育て・子育て”なのか、“矯正”なのではないか、と考える方がおられるかもしれない。しかし、このことこそが、この施設に培われて来た理念・理論の大きな特徴といえる。それは、子ども達は“育つ”主体であるということ、そしてその“育ち”が十分に保障されさえすれば、結果的に「不良性の除去」（正しくは、「不良性を除くこと」旧児童福祉施設最低基準第 84 条）に至る、という考え方に基いて“子育て・子育て”という表現を用いることにしたのである。

このことは、「彼等（子ども達）を、文句なしに受け入れる施設全体のふん囲気や、少人数からなる家族舎の暖い環境」（厚生省児童局 監修 1956：112、括弧内筆者）に置く、というフレーズに象徴されている。これは教護院時代に編纂された、職員の教科書とかバイブルなどと呼ばれた『教護院運営要領』から抜き出したものである。極端な言い方をすれば、このような環

境に置くことで、子どもは自ら“育つ”ということであり、このような理念は感化院時代の留岡幸助の理念に由来するものである。留岡は、偏見を持たない自然こそが子どもを感化するとして、“天然の感化”の重要性を説き、自ら創設した私立感化院・家庭学校に大規模農場を併設し、農業を中心とする感化院を築き上げた。

しかし、戦後になると施設は「不良性の除去」という目的と治療教育という方法が取り入れられ、それは「感情転移と同一化」を中心とした「教護理論」として広まり、一世を風靡したと言われている。しかし一方で、“感化的なもの”もまた継承され、教護院時代の主たる運営形態である小舎夫婦制とともに継承された。それが現在の児童自立支援施設においてなお息づいており、それが職員・関係者から“教護院らしい”と表現されるに至ったのである。筆者はこの“教護院らしい”とされるものを“キョウゴの世界”と概念付け、そこをフィールドとした（実際には児童自立支援施設を中心とする）フィールドワークを行って来た。

キョウゴの世界では、「彼等（子ども達）を、文句なしに受け入れる施設全体のふん囲気や、少人数からなる家族舎の暖い環境」に子ども達を置くために、職員が施設内に住み込んで彼らと共に暮らす、という方法を採用している。しかし、子ども達と共に暮らし、彼らが育つのをじっと待つ、という“感化的な”方法は、“言うは易し行うは難し”である。施設ではいわゆる「不良少年」が10人以上で共同生活を送り、彼らの多くは被虐待経験を持ち、その中には知的に低い子どもや軽度発達障害と思われる子どもも含まれているためである。それを可能にしているのが、キョウゴの世界における特別な環境であり、様々なしくみである。

本研究は、このキョウゴの世界における特別な環境や様々なしくみについて解き明かそうと、約12年間に渡るフィールドワークの蓄積と、これと平行して行ってきた理念・理論研究（文献研究）を総合し分析を試みた。その結果、筆者はそれを三つの要素に分類し、それぞれ、“ワク”、“リョウシャ”、“ムラ”と名付けた。

まず、ワクとは、「枠のある生活」（全国児童自立支援施設協議会2003:2）から取ったものであり、これは、子どもを地域社会から離し、施設に入所させ、その中で日課に沿った集団生活を送ること、つまり時間と空間の“枠組み”のことを指す。ワクは一見、子ども達を“閉じ込める”機能のようであるが、実は不適切な養育環境から子ども達を護る“砦”としての機能を持っている。

続くリョウシャは子ども達が施設内で暮らす宿舎である“寮舎”のことである。この寮舎は施設内に分舎したコテージであり、職員（や職員の家族）もまた、ここに子ども達と共に暮らしている。『教護院運営要領』では寮舎について「単なる物的な環境ではなく実に生きた教育的環境」（厚生省児童局 監修 1956:21）と表現されている通り、リョウシャは子ども達を育てる場所——職員と子ども、あるいは10人前後の子ども達が暮らすことで第一次的関係を育む——である。

最後のムラ、とは無論“村”であり、職員家族が施設内に暮らすことにより育まれる施設内コミュニティのことを指す。彼らは“お互い様”で“助け合い”ながら、素朴で質素な暮らしを営んでいる。寮舎が「単なる物的な環境」から「実に生きた教育的環境」であるリョウシャへ変わるのと同じように、職員が共同、共働、協働することによって、そこが単なる施設から、命を育む土壌であるムラへと変化するのである。

かつて、教護院時代には、三件の死亡事件が起きている。筆者は、ワク、ムラ、リョウシャ

のいずれかの要素が欠けていた、あるいはその三要素の三位一体のバランスが崩れた時に、このような事件・事故のリスクが高まると考えている。本研究では、これらの三要素がどのようにして子どもの“育ち”に寄与するのかについて迫り、また、この三要素がどのような条件で再現しにくくなっているのかについても考察するものである。

論文審査結果の要旨

コメント1

本論文は、「ウィズの精神」「足の裏の哲学」「暗渠の精神」のように、これまで抽象的・比喩的にしか語られてこなかった教護の世界を言語化するものである。「教護」の世界、および、そこに展開される「教護」という営みの言語化は、教護の世界に携わる者および教護の世界に関心を寄せる者が、その必要性を痛感しながらも、そのテーマの遠大さゆえに、これまで果しえなかったものである。

著者は、この遠大なテーマにチャレンジャーとして果敢に取り組み、長期にわたる丹念なフィールドワークをもとに、教護の世界を見事に浮かび上がらせている。その研究手法は、著者が、教護の世界の内に飛び込み、子どもたちや職員と生活を共にしながら、そこに展開される教護の世界を当事者と同じ目線で捉え、子どもたちや職員の声に耳を傾け、身体で受け止める、という姿勢が貫徹されている。さらには、教護院や児童自立支援施設という空間あるいは寮舎などの建物が、住民である職員や子どもたちに対し持っている意味や、及ぼしている影響といったものにまで目が向けられており、教護の世界について幅広く、深い考察がなされている。著者は、このような方法により収集した豊富な一次資料、ならびに、教護院運営要領などに関する徹底した文献研究をもとに、教護の世界を、既存概念や流行りの概念の間借りとしてではなく、平易な、著者自身が現場に奥深く触れたからこそ出てくる、生き生きとした言葉で浮かび上がらせることに成功しており、その意義はきわめて大きい。

この言語化の意義は、これまで現場において職人芸的なものとしてしか伝承されてこなかったもの、「いわく言い難いもの」を明らかにしたにとどまらず、教護の世界が現在置かれている状況や直面している課題を客観的に示すとともに、その状況の打開や課題の克服にとって何が必要かを示唆するという意味においても、その意義は大きい。

他方、著者の論文には疑問な点もある。例えば、第Ⅲ部第十一章第三節1「ストレングス視点」において、著者は、「キョウゴの世界は今日でいうところのストレングスの視点である」（483 頁）と述べている。たしかに、ストレングスなどの概念に言及することは重要であり、キョウゴの世界がストレングスの視点と親和性をもっていること、キョウゴの世界における「子ども」観がストレングスの視点におけるそれと類似したものであることは首肯できる。しかし、著者の研究のオリジナリティからすれば、そうした概念の器には盛り切れず、そこから零れ落ちてしまうものにキョウゴの世界の本質がある可能性も高

い。もっとも、これは研究内容の問題というより表現方法の問題と考えられる。

コメント2

- ・オリジナリティーがある

本研究は、丁寧なフィールドワークと綿密な文献研究から、これまで施設の現場で受け継がれてきた「書かれていないルール」や「知恵の伝承」を抽出し、言語化し、構造化しようとするチャレンジングな試みであり、オリジナリティーがある。また、抽出された要素の解釈は新しい視点を提示している。

- ・アーカイブとしての価値が高い

本研究の対象は、「書かれていないルール」「独特の用語、隠語」などというその性質上、このような形で記録がなされていなければいずれ消えていくものである。本研究は、アーカイブとしての価値が高く、貴重な成果といえる。

- ・政策的なインプリケーションがある

本研究は、「伝承されてきた知恵」の要素を抽出、分類、構造化することで、現在の施設の在り方に関する政策動向との連続性や断絶性を可視化しようとするものである。今後の実践活動の枠組みとなる制度政策の在り方を考える手がかりを示すものである。

ただし、弱点も認められる。

- ・文体の問題として、文章が冗長であり、分かりづらいと思われるところもある。
- ・第4の要素の位置づけについて、やや分かりづらい。質疑応答の中で明確化されたので理解できたが、文章表現に工夫があれば更に分かりやすくなったと思われる。

コメント3

・『教護院運営要領』が「教護院らしさ」「教護する」の指標としてきた三本柱、三分割に飽き足らずに、教護院の環境・施設・実践と子どもの回復・育ちとの接点に注目して、ワク、リョウシャ、ムラの三要素を析出したのは独創的である。それらを析出した理由も、文書資料データやフィールドワークデータを用いてなされた三要素の記述から理解できる。

・ワク、ムラ、リョウシャの三拍子揃った生活（三要素の三位一体）のなかで、お互い様で助け合う暮らしを通じ、子ども達はほんものの快を経験し、自分が快を与えられるに値する存在であるという自尊心を回復して、他者を思いやる気持ちを持つようになる……これが、キョウゴの世界が感化院以来めざしてきた「不良性の除去」だという説明は説得的である。

⇒ここでの「ほんものの快」について、暴力を止めた理由に関する聞き取り調査結果を分析した第IV第五章第三節を参照して、議論をもう少し深めて欲しかった。そこでは、サバイバー（子どもの頃に性的虐待を受けて大人になってカウンセリングを受けに来る人間）に関するリンダ・ジンガロの議論を基にして、「体の境界線」と「こころの境界線」を越え合うキョウゴの世界での暮らしを通して、その2つの境界線について子どもが他者との適切な距離を掴むようになるという観点から、子どもの自尊心の回復について、自我の現象学的なもう少し深い議論が展開されていた。

- ・『教護院運営要領』がキョウゴの理念としてきた「感情転移と同一化」のうちの「感情

転移」（子どもと職員の信頼関係、繋がり）が、同じようにキョウゴの目標とされてきた「不良性の除去」とどういう関係にあるのかについて説明が無いままなのは不満が残る。だが、一五歳の春の出所までに「同一化（職員が体化する大人役割を目標とする）」を達成するのは極めて困難なので、子どもの措置解除の期限が迫る中で、職員達が子どもの退所を考える最低限の基準としてきたのが、「感情転移（繋がり）」だったという説明は説得的である。

⇒第Ⅳ部第三章第三節では、この“繋がり”を「キョウゴ・モデル第四の要素」と称しているが、ミスリーディングである。本文中では前述のような記述をしているのであるから、正確にはキョウゴ・モデルの最低限のアウトプットかと思われる。

・職員達が子ども達の在所期間中に「感情転移と同一化」を達成することを見送る代わりに、在所期間中に獲得した「感情転移（繋がり）」を基盤にして、子ども達の退所後の人生に寄り添い、様々な犠牲を払いながら子ども達の「同一化」達成を支援してきたという記述には、斯界の職員達が営々と続けてきた努力にただただ頭が下がる思いがするとともに、申請者がかくも長期間にわたってこの研究テーマに執着してきた謎が解けた思いがした。本研究は、まさに教護の世界の「民俗学」ともいうべき、貴重な記録である。

・他方で、第Ⅳ部第六章で描かれている教護院の消滅（制度としての消滅、教護院らしきの消滅）は衝撃的である。申請者は2003年、2004年頃までは児童自立支援施設を訪問しても、どちらかといえば教護院という印象を受けることが多かったが2010年に入ると教護院という印象を受けることが無くなったと述べ、その背景として90年代以降に進められてきた施設の近代化（労務・人事管理・施設の近代化、分校・分教室方式による公教育導入）を縷々記述している。

これらは第Ⅳ部第三章第三節、第四節で説明されているように施設内の体罰の悪化の温床でもあるが、それ以上に問題なのは、施設児童の回復と育ちをもたすメカニズムとして第Ⅳ部第三章で申請者が描いた三要素の三位一体にダメージを与え、施設児童が在所中に最低限、職員とのあいだに感情転移（繋がり）を築き、退所以降の同一化（大人役割への）プロセスに必要な基盤を獲得する可能性を損なうものだ、ということである。

第Ⅳ部末尾の「最もトータル・インスティチューション（アサイラム）的だと見なされていた施設である教護院という施設は、実は、子ども達のアジール（世俗の力の及ばない聖域）だったのかも知れない」という一言は、何時の世も必ず一定割合で発生する不適切な養護環境に育つ児童達の回復と育ちには一顧だもせず近代化・現代化路線を邁進しようとする普通の大人（“行政の人”という言葉に象徴される）の不気味さに対する、申請者の精一杯の皮肉・警告と思える。鋭い文明批評を含む重たい作品である。

コメント4

本論文は、詳細なフィールドワークに基づいたリアリティに富む描写が根幹をなしている。それは、これまでの研究にはない特筆すべき点であり、高い学術的な価値を有している。また、児童自立支援施設（旧教護院）の存立機制に関してオリジナルな理論を提案し、この分野の研究に新たな地平をきりひらくものと評価できる。社会学理論における位置づけを明確にすることなど、今後の課題として探究すべき点は残されているが、少年の保護

や矯正のあり方に一石を投じる力作であり、博士論文として十分な水準に達していると判断する。

コメント5

感化院から児童自立支援施設に至って行われた子育て・子育てを、キョウゴ・モデルとして練り上げることを目的とした博士論文である。特に、これまで十分に言語化されてこなかった営みを、長期に渡るフィールドワークだけでなく、歴史研究、実践理論研究の視角も加えて「教護理論」を包括的に捉え直し、現在の児童自立支援施設に今なお根付く「教護の世界」を、「キョウゴ・モデル」として描き出そうと試みている。

特に学術的意義として高く評価できるのは、「キョウゴ・モデル」の特色として「ワク」「リョウシャ」「ムラ」という要素を取り出したことにとどまらず、それらが一体としてあることの意味を提出している点である。また、それらが一体となる場合の特別なバランスにも分析を深め、そのバランスを欠くことが暴力につながっていくという解釈については、もう少し説得的な議論の展開を期待したいと願う反面、解釈枠組としてある説得性を提出していると思う。

弱点としては、第4の要素として提示される「繋がり」が、そもそも「ワク」「リョウシャ」「ムラ」に準じる要素であるのかどうかという点は疑問に感じた。著者は、おもに、退所後に注目することで「繋がり」の要素を提示していると判断できるものの、退所後に見える「繋がり」は、そもそも「ワク」を「ワク」として機能させるために潜在的には存在していたという解釈も可能であるように思う。

いずれにしても、これまでに言語化されてこなかった営みを、厚い記述により描き出したことは、第一義的に評価されるべき点であると思う。加えて、今まさに起きているそのことの、そこに引きさせている要因を、歴史的に遡りつつ明らかにすることで、結果として厚い記述となっている点は、独創性の高さも評価されるべき点であると思う。さらに、制度の変化を視野にいれることで、近代批判的の側面ももっており、研究成果が分野を超えた波及効果をもっている点も評価されるべき点であると思う。

【総合評価】

以上、字句の使用や文章表現に関する指摘が幾つかあったが、申請者の本論文が大きな価値を持ち、博士号を授与するに値する貴重な研究成果であることについて五人の審査員の意見は一致した。